

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 キリスト教学 研究科 キリスト教学 専攻		
研究代表者 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	キリスト教学研究科 後期博士課程2年	國友 淑弘 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	キリスト教学研究科	大島 博 教授 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	19世紀アフリカ系アメリカ人スピリチュアルの音楽的機能について		
研究組織 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	キリスト教学研究科 後期博士課程2年	國友 淑弘	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
<p>アフリカ系アメリカ人の音楽は、大きく文学的研究と音楽的研究に分類される。その中でもスピリチュアル（黒人霊歌）は、アフリカからアメリカへ強制的に連れて来られ、奴隷として生きてきた約300年近くにも及ぶ歴史的経験と文化によって、生み出された独自の音楽であるといえよう。その音楽要素はどのような機能をもってその役割を担ったのか。20世紀初頭にゴスペルへと変化しようとする直前、最も円熟期を迎えた19世紀に記譜化された資料に絞ってその意義を探求する。</p>

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)
[スピリチュアル (黒人霊歌)] [アフリカ系アメリカ人] [応答形式]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究概要を基に、19 世紀アフリカ系アメリカ人スピリチュアルの音楽要素内、応答形式に焦点を当て、類型の分類から、応答形式における音楽構成の体系化を行った。それらを基にそれぞれがどのような機能を持っているか、音楽学による方法論を基に構造を探った。

1. 先行研究から示される、前形態であるアフリカ音楽の応答形式について

アフリカ系アメリカ人の応答形式は、西アフリカでの応答形式がその発端となる。アフリカの応答形式については、初期の記述と各先行研究者によって、既にその意味が纏められていた。それらは典型的なアフリカの「詩の形 (poetic form)」を持ち、「節 (stanza)」と「コーラス (chorus)」を繰り返すものであった。

アフリカの部族には「語り部 (griot)」が世襲で引き継ぎ、家族や先代の歴史を伝える役割がある。「語り部 (griot)」は部族の言語文化を率いていた人々であり、伝統的知識と文化的遺産を伝える役割を担っていた。

アフリカの歌のレパートリーは娯楽のためか、あるいは作業、戦争、儀式、祭りのためというような目的が決まっており、その場の雰囲気や実際に行われる行事が当然、歌詞にも反映し、主題の選択にも影響を及ぼす。しかしながら、レパートリーには直接その行事に関わること以外の主題も含まれ、それによって歌手が状況や気分の変化に対応でき、基本的要求を超えて広がっている。大きく分類するなら「子守歌」、「思想歌」、「歴史的伝承歌」、「一般的な歌」が挙げられる。

構成に関して「話し (speech)」、「叙唱 (recitative)」、「詠唱 (chant)」、「歌 (song)」のそれぞれは一定ではなく、その主題となるテーマの展開や物語の流れによって、それぞれに変化するものであると同時に、それら関係は結び付けられて (integrated) いた。

歌の中には、音楽と同等かそれ以上の重点を言葉に置くものもあれば、言葉よりも音楽の構造と形式に、より注意をはらっているものもある。数々の歌に何らかの統一や一貫性を与えているのは、多くの場合、音楽の方であった。歌詞は、各単語の発音上において高低を伴い、メロディを生み出す要素となっていた。

2. 応答形式に適応する分類方法とその分析結果**2-1. J・H・K・ンケティア (J. H. K. Nketia) の「作詩法の関係 (prosodic links)」の使用及び確認**

フレーズは歌の言語構造と文法単位とに関係しており、拍構造の中で均一にバランスを取る。それらバランスを保つ基準が韻律である。この韻律は、賛美歌学では「ミーター (meter)」と言われるが、この時代のアフリカで西洋の賛美歌は存在しない。したがってこの形式には当てはめて考察することは出来ない。そこで J・H・K・ンケティアの「作詩法の関係 (prosodic links)」を用いて、応答の分類が可能かどうかを、E・サザン (E. Southern) が取り上げる最も古い応答形式の歌詞の記録に当てはめ、確認した。

2-2. A・M・ジョーンズ (A. M. Jones) の音楽的分類に加えた、可能な 4 つの分類方法と結果

次に A・M・ジョーンズが先行研究で行っている「①リズムによる形式 (Summary of the metrical form)」と「②フレーズによる形式 (Summary of the phrase-form)」を確認し、ンケティアの作詩法の関係を用いた「③歌詞を中心とした構成方法」と、「④譜面上を基に実際の演奏による構成方法」を用いて分類を行った。結果は、類似した形式も見られるが、どれも同一のものはないことが明らかとなった。

2-3. 4 つの分類方法による分析結果

4 つの分類を分析した結果、スピリチュアル (黒人霊歌) の前形態であるアフリカの応答形式は、どれも同じものではなく一貫した形式を見出すことが困難であることが判明した。アフリカの応答形式は、様々な切り口と分類によって可能であり、それは歌 (単数、複数)、楽器類 (単数、複数)、歌詞 (様々な分け方) の組み合わせによって多様な色合いを表すことが証明された。

3. 和音と時間幅の分類方法とその分析結果**3-1. J・W・ワーク (J. W. Work III) が用いる譜例の分析**

J・W・ワークは、『*American Negro Songs*』(1940) 中で、C・S・ジョンソン及び、T・E・ジョーンズが所有するズールー族が歌うレコードプレーヤーの記録を基に、応答形式の楽譜を提示している。それには 3 度幅の和音 (harmony) が存在しており、呼びかけ (call) と応答 (response) の時間幅がほぼ同一であった。またそれぞれのメロディラインも類似している。数回聞けば、演奏も可能な単純なものであった。

3-2. T・E・ボーディックの譜例の分析

E・サザン及び G・クービック (G. Kubik) が用いるボーディック (T. E. Bowdich) のアジャンテの 1800 年初頭の楽譜に見られる応答形式は、呼びかけ (call) と応答 (response) の時間幅が同一ではなく、また和音の度数も 3 度と 5 度が入り交じっており、複雑且つ、ある程度練習を行わないと演奏できないものであった。

研究成果の概要 つづき

3-3.分析結果

時間幅が決まっているものは、呼びかけ (call) が終わってから応答 (response) をすれば良いため、即興でも可能である。しかしながら、バラバラなものは決まっていなくて歌うことが出来ない。したがって、応答は、形式が決まっているものと、決まっていないものが存在する。ワークの譜例は呼びかけと応答の時間幅がほぼ同じなので、決まっていない可能性が高い。メロディも呼びかけと応答が全く違うものはない。呼びかけが高音で、応答が低音のような箇所が全く見られない。したがって、急な参加者でも、呼びかけの通りに応答すれば良い。即興的に行われても応答可能なのである。しかしながら、T・E・ボーディックのアシャンテの譜例は、いつ応答が入るか分からない。時間幅が異なるため、急な参加は出来ない。

その違いは、リベリアとアシャンテの違いである。アシャンテは王国が存在するが、リベリアにはアシャンテのような王国は存在しない。人口密度高く、社会的階級が存在するのもアシャンテの方である。アシャンテは、リベリアよりも都会化されているのである。リベリアよりも都会化されたアシャンテの応答形式は、複雑であり、即興的に歌うことが出来ない。また 19 世紀初頭には、既に 5 度幅の和音による応答も存在し、同じ言葉の繰り返しも多くないのである。都会化された場所の音楽は、形式が決まっている可能性が高い。

4. 19 世紀アフリカ系アメリカ人スピリチュアルの応答形式について

4-1. 北部

北部アフリカ系アメリカ人が初めて編纂、出版した賛美歌『*A Collection of Spiritual Songs and Hymns, Selected from Various Authors*』(1801) には、テキストのみであるが、I・ワッツ (I. Watts)、C・ウェスレー (C. Wesley)、J・リーランド (J. Leland)、J・ニュートン (J. Newton) などといった白人が作曲した曲が多く含まれている。編者の R・アレンは、この賛美歌でコーラスと繰り返し (反復) を示す「wandering refrain」の指示を与えている。この指示は、他の賛美歌とは明らかに違うアフリカ系アメリカ人賛美歌の明らかな音楽的特徴であった。

4-2. 南部

南部アフリカ系アメリカ人奴隷歌を最初に記譜化した『*Slave Songs of the United States*』(1867) には、歌唱指示 (Directions for Singing) が示されていた。

ほとんどの曲の歌詞はそれぞれ 4 行分を一連とした節 (stanza) にアレンジされており、いくつかは固定された 1 連の節 (verse proper) が存在する。最も一般的なアレンジは、2 行目と 4 行目が反復であり、1 行目と 3 行目の節 (verse) において 3 行目が 1 行目のリピート行っている場合、異なる言葉を用いる。反復はそれぞれ 4 行分を一連とした節 (stanza) で行われる場合、1 番 (verse) の言葉はリーダーによって変えられる。呼びかけ (call) を行うリーダーは慣れた言葉を使用するが、その紡ぎだす節 (verse) が、次々と生み出される場合はその歌が続いていくというものであった。

4-3. 各特徴から

アメリカでの応答形式は、南部では呼びかけ (call) と応答 (response) が確認出来るが、北部でははっきりとした応答は確認出来ない。北部、南部双方に残っているアフリカ系アメリカ人の音楽的特徴は、繰り返し (repeat) であった。それは、何度繰り返され、いつ終わるかが示されていない。南部の応答形式ではリーダーの紡ぎだされる呼びかけ (call) が才能にあふれ、次々に生み出される場合は延々に続いていく。

上記の事から、応答形式は、繰り返し (repeat) を中心に即興される可能性を保ちながら構成されていることが分かった。

5. まとめ

アフリカの音楽要素である応答形式は、基本的には単純な形式であり、誰もがすぐに参加可能な構成を持っていた。しかしながら、アフリカ内でも人口密度高く、社会的階級が多く存在する都会化された場所では、その単純な構成が崩れていた。

白人との交流が盛んな都会化されたアメリカ北部自由州では、白人が作曲した曲を賛美歌として使用している。明らかなアフリカ系アメリカ人の音楽的特徴は繰り返し (repeat) しか残っていない。彼らの音楽要素は、都会化とヨーロッパの影響によって、かなりそぎ落されてしまっている。反対に残されている要素は、繰り返しを中心にして即興される可能性のみであった。

音楽が即興される可能性を保つことは、決まった形式から反するものであり、それは応答する者たちと即興的に一元化を生み出すと共に、囚われることない顛れを示す。それこそが即興の機能ではないかと結論付けた。

※この (様式 2) に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書 (A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式) を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

・ 研究成果の一部を、論文『イエメン系ユダヤ人女性の歌について ―応答形式を切り口としたアフリカ音楽との比較と分析―』として纏め、関東学院大学キリスト教と文化研究所、所報『キリスト教と文化』(レフリー付き)に投稿、第13号(2015年3月発行)に掲載可となった。

・ 研究の一部を2014年度、青山学院大学総合文化政策学部「キリスト教概論」特別授業に纏め、講義を行った。

・ 研究の一部を2014年度、立命館大学文学部「英語圏研究概論」特別授業に纏め、講義を行った。